新勅撰和歌集　上

特別
へ4
8099
9(1)

新勅撰和哥集

よゝときのみことのりをうけたまはりて我国の大和
うたを撰ひてえんきのひしりさむらしにはしらく
菅乃根のなかき末代につたはれりいにしへ古今後撰の
二の集をはしめて後あつめおけるやまとうたに准てあつめたる
うちてにしもたしこゝにしはしめてこゝにしるす名たかくきこ
ゆまさしく九重乃雲井をはなれて久しく月日をへて
もこゝにもかしこにもたゝるを撰ひたてまつりたれ代の
さたまりし白河のすへしれはかはりしやまと政よのそ
ませはひとく七十あまりのよはひよそちあまりをへにしかは

島原文庫

ヘ4
8099
9
(1)
〈2001-022〉

後拾遺を撰ひのもとをしたむあつめしことのはゆゑあ
めしたえにしめしろくよきこのことちかき世あまりぬ春
秋よもの海のしつかなる波をもたかくに七の道民の草葉
もなひきよろこひありかすもあまたありしをたさめ野草
のたゝへしをおこなはせたまひさあきらかよに家
あいはまつり川さかえている盛なりさて延喜天暦の
むかし時をもはしめて民ゆたかなるこゝろにあまねし政を
たまふの御ことあり次又寛喜貞永ありし世にそまる人
風をくものしきむのたぬしめむためとて
におつるかえてけるにあし　定家を海松の年はそら

竹の葉にふりつもりきゆくて七十あまりのよはひにちかく
しれはあさくのゆきをきえぬくしもたえてなきてかたみに
いまはかたみのことをうけてしもにのかれかたきを撰ふの時
にあひてひとくちの孫の詞をまなくへよろつ代家のおもひ
をふへきたゝせてしもをとうてたゝて雨よりもて春夏秋
冬たうつのことのはをはしめて恋の世をいはさ
てまつり人の國をおさめおこなひ神を敬ひ佛を
いのりをうつことをこゝい身なるいをおのつからにほまれ
詠越まうち巻をなとめく濱のまさこのかとくふ
うらの玉もかきあつめつらし　貞永元年十月二日

事を奏せしめて名つけゝる新勅撰和歌集とす此
いふことしかり

新勅撰和歌集巻第一

春哥上

うちのをのこども年の内に春たつといふ心を
つかうまつりける

御製

あらたまの年もかはらて立春は霞はかりそ空に知りける

立春の心をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

けふといへはもろこしまてもおしなへてけふよりや春ハ立けれ

延喜七年三月内の御屏風に元日雪ふり侍る
日

紀貫之

ふる雪のまたふるとしにはるはきて花そ咲ける

題不知

読人しらす

冬すきて春ハきぬらし朝日さすかすかの山に霞たなひく

冬かれのゝへとわか身を思ひせはもえても春をまたましものを

京極前関白家肥後

春のたつあしたの原の日草をかへりてみよの行

宮れハ

いつしかと降そむる春雨にもえいつる野への若菜

題しらす

大中臣能宣朝臣

ふるさとのかきねの若菜つみにけり春雨そゝく深雪のかり

三条右大臣家屏風に
貫之
山さとは人もなかれと宿なれし鶯の声は風にもさそはれけり
法性寺入道前関白家に十首歌よませ侍りけるに
鶯をよめる　権中納言師俊
うくひすも鳴つゝなれし人のわか宿の梅の花の香はむかしおほゆる
鶯声にたくへて梅の心をよみ侍りける
源俊頼朝臣
春そとは霞にしるし鶯ハなれの声のうつろふこそつけなれ
久安六年崇徳院に百首歌奉りける時
待賢門院堀河
霞のうちハ谷のとにみえし鶯の声のこなたハ霞みけり
前参議親隆
松嶋やをしまの浦の夕霞さらにまされるいさりひもなし
後徳大寺左大臣十首歌よみ侍りけるに遠村霞と云
心を読侍りける
皇太后宮大夫俊成
朝戸あけて伏見の里になかむれは霞にむせふ宇治の川浪
守覚法親王家に五十首歌よませ侍りけるに春歌
覚延法師
すみぬらし此松の嵐もかすむなりかつらき山の春なれは　眠

源師光

山人も見もいはれぬみやまかにこゑやかそふる春のはしめは

百首歌に　　式子内親王

みわたしの海や霞にまよふらん舟のゆくへも春の色なれ

後京極摂政左大将に侍ける時百首歌よませ侍けるに　　八条院六条

月ならて見る物は山の上にかゝる雲ならて春霞かなの

題しらす　　曽祢好忠

佐保姫のたち衣さなからはれぬ霞さらは春の野辺

木のめはる春の山へをきてみれは霞の衣たゝぬ日そなき

巻向の穴師のひはら春くれは花か雪かとみゆるゆふして

船なからよさのうら波こえて淀の川長き春日もさくらかなとの

山辺赤人

岸のうへの小竜は春になりつゝ見すゝに河柳そよに思ひかたき

柳をよみ侍ける　　伊勢

青柳の枝にかゝれる春雨はいとにてぬける玉かとそみる

あさみとり深くそめてまつる青柳の糸をは春の風もよるらん

天暦御時屏風の歌　　中務

吹風にまかせぬ岸の青柳ものこる波は春風まかせたり

千五百番歌合に　二條院讃岐

百敷や大宮人のむかしよりかけてひさしく青柳の糸

青柳といふ題にて　按察使隆衡

をしなべて来る人もなしは春風の吹てみだるゝ青柳の糸

寛喜元年十月女御入内屏風江山人家柳を
よみ給ひける　内大臣

うちわたす世は春なれや吹風も枝をならさぬ青柳の糸

正三位知家

山姫のかすみをすくりかけて春は柳をぬひやきぬらん

春の歌とて読給ひける　頼実太大臣

三芳野に春しきさる時は青柳のかつらき山に霞たなびく

古郷の軒端の風よりかつたひ来る梅の香花

梅花をおりて中将のもとにつかはしける

九条右大臣

いかにせん雪も霞も非ずしてわが宿の梅花をわすれぬ春はさらにいかゞ

鶯鳴く梅花をみてよみ給ひける

山上憶良

春されば先さく宿の梅の花ひとりみつゝや春日くらさん

題しらず　凡河内躬恒

いつまでをわきて折りし梅が枝の霰もたえに匂ふ白雪

貫之

山風にさそはれてや梅かゝは雪にしらしとそ呼

亭子院歌合に　坂上是則

きえのこる雪とみえしはちりかゝる梅の花にそありける

読しらす　沈子内親王

ちるの垣ねはこゝもあらぬ梅の花の香のまくるよそれなかりける

権大納言家良

玉鉾の道のゆくてに春風にたか里ちらぬ梅の香をまつ

殷富門院大輔

移り行くこそねたけれ春梅かゝるにほひを独寝のよく

正三位家隆

いく里の月のひかりも匂ふらん梅さく山の峯の春風

後京極摂政前太政大臣

春歌とて読侍る

難波津にさくやむかしの梅の花いまも春なる浦風そふく

守覚法親王家五十首歌よみ侍るに

寂延法師

春の夜の月もむかしやしのふらん津の宿にほふ梅か枝

皇太后宮大夫俊成

梅の花たか袖ふれし匂ひそと春や昔の月にとはゝや

高陽院の梅の花を折てよみ侍ける八

大貳三位

いとゝしく春のこゝろのそらなるに又花の香を身にそしめ
けし

宇治前関白太政大臣

見なすへきことのはかりに梅かえをまなく白しとそみる

家百首哥に紅梅といふ心をよみ侍ける

前関白

春ゝともあかさむる月に梅かゝにほひぬれともみゆる浪かもしるらん

後京極摂政の家の哥合に暁霞をよみ侍ける

宜秋門院丹後

春の夜のなこりの月やあさ梅の霞にくもるあけほのゝ花

百首哥奉けるに花梅雪をよめる

権中納言師時

かをらんやよしもしらなみよせてのこる梅か衣さらかへすの川
影しら浪

大納言師氏

久堅のみそらは見ゆる雲ましゝに見るも梅の花はうつらん

前大納言資賢

こち梅ての戸ほそさぬ香にほゝその相風よ雲に浪やかくらん

読人しらす

白妙のはなのこけるや春はかる風のまにまにもも咲けり

中納言家成家哥合し侍けるに山寒花遅といふ心

花よみ侍けるうたのうち

藤原基俊

みよしのゝ山辺にはらむむすひてや花の下ひもとくらん

題しらす

修理大夫顕季

霞しく木のめ春雨ふるからにぬれたる花はかねてにほへり

権中納言長方

きのふまて見し山桜ゝゝ吉野の山の花のかけ道

寛治七年三月十日白河院小山にみゆきありけるに人々ほとりしきに花といふ心をよませ給ける

久我太政大臣

山桜かさねてにほふ見えぬをは春のちる花ちらぬ山かけ

右衛門督基忠

春はたゝ山の雲そなかりける花の梢をゝらて見る人

崇徳院近衛殿にわたらせ給て遠尋山花といふ題を講せさせ給けるによみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

おもかけに花のすかたを先たてゝいくへこえきぬ峯の白雲

家に百首哥よませ給ける時

後京極摂政前太政大臣

むかしたれかゝる桜の花をうへて吉野を春の山となしけん

寂蓮法師

待つはるさそれ咲ぬらん吉野山すゑの山にかゝる白雲

むかし家に五十首歌よませ侍りし日五首歌に

藤原成宗

花もまた尾上の山の春風に朝ゐる雲も嵐にたつ雲

家に三十首歌よませ侍りし花歌

入道前太政大臣

白雲と風にまかする山桜ちるはよそめに吉野の

百首歌に

式子内親王

たかさごの尾上の花にゝほふ雲峰の桜のかさなりぬらん

かすかなるたかまの山の白雲は花のちるかや峯の旅人

歌合に雲間花といふことをよませ侍りし

前関白

はるふかき雲とは日をかさねつゝ咲大桜名のはるの中く

実白左大臣

立まよふ峯の桜は花にして雲にのこれる嵐山かせ

典侍因子

けふのみと花をも見よし山桜ちるにや夜の間にかはる雲

中務かね

きえのこるまたたなびく雲と見るまでにはるかすみてそ見ゆる桜木

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

花ゆへによそにみえつる我宿は雲やかすみの花のふもとも

家に百首歌よませ侍りけるに

後京極摂政太政大臣

春はなれしあかれし桜しらくもてそ雲にかゝれるみよしのゝ山

清輔朝臣家歌合し侍りける花歌

俊恵法師

みよしのゝ花のさかりに知られけりさくらならぬはやまさくらなれて

正治二年百首歌奉りける春歌

皇太后宮大夫俊成

雲やいつ霞やゆふの山桜をれよりかはも花とみゆらん

千五百番歌合に

正三位家隆

さくらみる道八重もゆくらにしら雲もまてかすみのまつる(?)よしのゝ山

新勅撰和歌集巻第二

春歌下

みこにおはしましける時よみける

光孝天皇御製

山桜さかりはことにかくれなき霞はけしつゝみてみるよしもあれ

題しらず

山邊赤人

神さびしふるのみ里に住人も歌よみならし花をこそみれ

貫之

あつさ弓春の山邊にいる時はかざしにのみぞ花はちりける

源重之

なにはむとし春やまとのふもとまで山の桜を宿りてぞみる

山花未落といふ心をよみ侍ける

橘俊綱朝臣

咲ちらぬ桜ありとぞ見ゆるかなよし野の山にかゝるしら雲

月あかき夜花見にまかりける人にかはりて

和泉式部

いにしへもかくやはありし春の夜の月と花とにあかしつる哉

尋花遠行といふ心をよみ侍ける

藤原為仲朝臣

かへりみる宿は霞にへだゝりて花の所に宿もくるゝ哉

百首歌よみける時

こゝろ我の梅か枝は里ハいつこに庵をむすひてそ見入道

白河院御時女房東山の花見にまかりける日よ
み侍りける　　権中納言師時

ふるさとは春日の桜いかならんそれとみる人にこゝえまし地を
　　権中納言俊忠

立かへりまたやとはまし山風に花ちる里の人の心を
　　藤原敦兼朝臣

駒なへてもの思ふかたりつゝも此山へ花桜とそみれ
春日行坂こえてこそ訪ねきつるに花こそみえけれ

訪ねこぬ女車の花を折かさして侍りけるを見りの
かさはりにさらてかもしらぬ車にのりて入らせ侍
りける　　よみ人しらす

あさ海の花鳥そまきける山桜ちらぬ梢のもろともに色よ

おなしき時中宮女房花見にまかりて又の日花為
春友といふ心をよみ侍
　　権中納言国信

花さかぬ我山の苔みえさて人よりさきにや春はいそくらん

たかうの時鳥羽殿に行幸の日池上花といふ心を
よませ給けるに　　中納言実隆

はるさめにまさる池のうき蓮ハ浪さへいかゝ折ける

法性寺入道前関白家にて雨中花といふ事をよ
み侍りける

基俊

山桜袖にまかひしやうはなれそ花の雫にいとゝぬれける

寛平御時きさいの宮の歌合歌

よみ人しらす

春の年ハ暮なむちる花をおしと啼なる鶯の声

延喜六年月次御屏風三月つこもり

多なくみ暮行人ハつねならは春はゆくとも帰らさらまし

貫之

山田にハまたはるをちる花のかけには風よりさはらなん

左兵衛督朝任か見侍りける所にて文にかきて侍る

よみ人しらす

大弐三位

さしもこら花の心ハ春の歎の都なりけさ

めの

後冷泉院御時月次に落花といふ題をよませ給

大納言師忠

春の夜の月もかすみてかゝる宿ハこすゑにちる花やちるらん

建暦二年春内裏に詩歌をあはせられ侍し歌

山居春曙といふ心をよみ侍りける

六条入道前太政大臣

月影のますみにみゆる山のはに花もかゝよふ春の明ほの

權中納言定家

名もしるし峯の嵐も雪とふる山さくら戸の明ほのゝ空

嵐山花といふ事の色紙より見え侍る

藤原行經朝臣

あらしこむ風静なるみよしのゝ山の桜はまたふくもあらぬとも

翠首高寺けの小花下送日といふ事を

後京極摂政太政大臣

春の雪海くれぬの枝しもん我世爲ねへき花の陰かな

閑路花

あふ坂の関よ見えつる波かゝりくるはこれかあま思ふものゝしら波

題不知

西行法師

風ふけは花の白波岩こえてわたりわつらふ山川の水

あらし猶たえてやくる春風に花をみて深くやまに尋入けん

權中納言長方

春かせの風に吹まくにしら霧のたえまあきゆく花のしら雲

前関白家歌合に雲間花といふ事をよみ給ひける

右衛門督為家

立のこる本たに思もみえす山桜それかあたりに匂ふしら雲

藤原隆祐

かへるさやこゝろ桜の雲に見しかくましかし花の色そたちそふ

中宮但馬

よしの桜や花にみしら雲晴居てそれもみえぬ山桜かな

建暦二年大内乃花下にて三首哥つかうまつりしを

首よ

大納言定通

ゆくさきの道しれとてや桜ちりのまかひはよそもくもりけり

大宰大弐重家哥合し侍りけるに花をよめる

源師光

ゆくる花ゆへしの一年にふたゝひとてもあるやはせたえさらん

題しらす

鎌倉右大臣

桜花ちらはをしむも時のたゆきさりかけてかくれ哉

内大臣

さそはれぬ人は桜の色あかぬうちにちりそめ風をくらしも月日

参議雅経

春乃夜の月もおほろにたなひきかへるらむちるもよ誘しさに

藤原行能朝臣

うつろはん人の心をしらぬそき花のえをみえし嵐のしら雲

藤原信実朝臣

山桜さそはれちりのこるきれ春風にふくよそひともの今日かりかき

殷富門院大輔

はる花ちる數ならとおしくて侍つまてれ春にあへるしるしならん

とも讀侍けるに

前大僧正慈圓

花ゆへにおもひいる人のまよひにはおもはれし春の山かせ

ちるものとおもへはみよしけれとも宿れる春の暮そさ

後京極摂政前太政大臣

花をみる霞のそこにいつるひてならふにさそはれくを猶深の山

たか砂の尾上にかすむも春くれは残る松のまつ(ひ)ける

建保六年内裏歌合春哥

入道前太政大臣

うらむへきかたこそなけれ春風のやとりさためぬ花のふるさと

題不知

権中納言公實

やま桜春のなかはに成ぬれはみる人なしにちりそちるらむ

後京極摂政家歌合に遅日をよみ侍ける

按察使兼宗

をしみえもかくてや人のくらしけん山路の月の春の下かけ

堀河院に侍ひかさかまての以後よ桜の花の枝折て

鞠を付てはなせ侍りける紙にかくよみ侍りける

周防内侍

長閑なる春はいふには花もちり次にて春のくるゝをみ成ぬるかな

寛喜元年女御入内屛風和歌細引所

正三位家隆

浪風もつきせぬ代の春にあひてあまの浦人今そ日をかれ

ゆふ山に出て侍ける時春乃山をみわたしてよみ侍ける

本院侍従

雲のゐるをかなりにかすめる春山乃霧さへ出てゝ雁やなくらん

蔵時春尚少といふ名をよみ侍ける

大江千里

かすみ月のおほろに見ゆる時かし三ゝへや春しもたえまさく眺侍ん

千五百番哥合に

二條院讃岐

春秋のみわけ侍るいろかして八千世の御冬にさかえん

春乃暮の哥

入道前太政大臣

ちるをしにほへ花は限りのある春もしらぬ月も見にのこ行る

亭子院哥合に

貫之

花ぬさとちりこそまかへ桜花春はとてもいとゝ暮る家

承議藤原家の哥合に

よみ人しらす

見ぬ人はいかゝかるらむ日かしのいそて乃里の春さへちりぬ花

右御歎名といふ題をよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

春の暮と吉野の宮は川ぞひまかしの山吹のけさすゝしてか

題しらす　　鎌倉右大臣

玉藻かる井てのしからみ春かけて咲くや河瀬の山吹の花

暮春の心を　　入道二品親王道助

春すきしかすみこむ春風松の戸無ぬまつかれし花の名残け
花ちりてかけ見えし木の間にゆけるもの色ハ池水春の見え

雨中落花といふ心をよみ侍りける　　俊頼朝臣

雨ふれハ花のうへ葉に袖ぬれて花にしほるゝ見るなこりとも

五十首歌奉りけるに　　嘉陽門院越前

よし野河きしの岩ね山吹の花たえてゆくも浪ハかゝるとも

百首歌奉し　　前関白

立かへる春の名残をはかなむともやかて見えん人の池水落花

家に百首歌よみ侍りける暮春　　実白左大臣　　此本に作者なし

春過るつかの霞の衣さらに別れ花をはなれてにほふ春かな

同大臣

空母ならぬしたはしむらさきにきえてぬる夕暮の春風ぞふく

名安百首歌奉りける時三月尽歌　　皇太后宮大夫俊成

ゆく春のかすみの袖をひきとめてしほるはかりやうらみかけまし

新勅撰和歌集巻第三

夏哥

題しらす　　相模

霞たに山路にしはし立とまれすきにし春のかたみとも見ん

二条太皇太后宮大弐

なつ衣きのふはかりにかはれとも山ほとゝきすひとへに我をまつ
夏のしるしとそなりける

二条院皇后宮常陸

さみたれのつゝきしきけふ卯の花のかきねも忘れなりに

家百首哥に首夏の心をよみ侍りける

前関白

夕月は波よりいつる夜もすからやかたの玉川花そさく

題しらす　　よみ人しらす

さとやまのかきねの卯月に咲にけりさくらはまてやひらけん

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

いくちよのみゆきにあふひ草たつまとゐせん年月をかけならん

寛喜元年女御入内屏風

権中納言定家

冬さむみかつはる卯月の花もちるひらくはいく世なるらん

中納言行平家歌合に

よみ人しらす

とむ里ハ志のゝ杜の郭公まちしさとにも鳴わたるなり

題不知　田原天皇御製

神南備のいはせの杜の郭公ならしの岡にいつかきなかん

祐子内親王家紀伊

宮こにも招きもまたし郭公一声をしもあらぬものを

郭公歌十首読侍けり

法性寺入道前関白太政大臣

ふた声ハきかすともまたあるしハ人もかたらし里に

題不知　大蔵卿行宗

いたつらに寝てやあかさん郭公まちさ月のみしかよとも

建保六年内裏歌合夏歌

参議雅経

子規なくやさ月のむらさめにあかてやすきておもひのこさぬ

寛喜元年女御入内屏風五月池に菖蒲葺

前関白

ゆふ月夜ふかきあやめのやとの今年もあさみとはたかめふくみ

入道前太政大臣

いく代とも忘られぬへき鳴声を待てかへしにやまほとゝきす

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす
ありなからさ月のこゑとみするを世ハ水ちる音楽しぬ家のかけ
読不知
杜鵑なきつるかとあやめ草かけてさ月にたちかへるかな
貫之
新古今撰歌ニ
かくれ家の軒のたちはなさきにけりさ月まちえてさ月のほとに
正三位家隆
今はまたかけてしらせよ時鳥あやなく月のあはれなれ
親頼成義
白河院御時きさいの宮の歌合に
神戸けの宿をそ上小花橘をたちてきゝまつことのかたの
たちはなをまきのしつくに涙そてぬれたる
源師賢朝臣
時鳥いつこに鳴てなかるらん花さくとをるとこそ人かたらへて
なし
康資王母
わけき涙あれそらむもの宿るかたや草の枕たまらん
久安百首歌奉りける夏歌
大炊御門右大臣
おほつかな声もまた松山ほとときす小山田の里にこゑの[illegible]
皇太后宮大夫俊成

ゆくぬさに也ち種すみれ夏秋とまされせてそなたく郭公外

十首うたよませける時

太宰権帥公行

さかゆくと山ありて君か次名をのこしてき我君をいはれすくなり

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

子日する野へに小松をひきつれてこゝろにまかせいく千世のはる

寛喜元年十一月女御入内屏風につかうまつりける

よみ侍りける

右衛門督為家

なかれ行日かすのかすのをたえすしてちよにかよふといふはるきみ外

左近衛の郎云といふ家のゑをよみ侍りける

権中納言長方

あまたたひにかゝる津の宮さはかりそなたにかゝり出てかへるらん

後法性寺入道前関白百首歌よませ侍りける時大嘗会

をよみける

皇太后宮大夫俊成

かり初に宮居はかはらぬすかゝはの十瀬毛さかぬ五十日にかへる

六月祓を読侍りける

後徳大寺左大臣

卅日毎よ六田の川よこみ河柳うちなひきなかれ瀬や瀬ゝはるゝなる

六條入道太政大臣

ゆくこれは保せたのおきゐもしかもかさゝてそ風をうつちきおく

前右近中将資盛

五月雨乃日数ふる屋ハ水に漏てうき草まじる軒乃玉水

左近中将公衡

五月雨ハ水乃色さへ雲間ハさは河袖ハひちてわたる瀬もかり

源家長朝臣

打はへて今日もあやめの蘆の葉のころもほさぬ五月雨ふる空

題しらす

春宮権大夫良實

橋乃もとに吹風やまたになるらんむしろ掛乃五月雨ふる空

関白左大臣家百首歌よみ侍けるに

藤原光俊朝臣

五月雨ハ雲も月ハひとつにてくもりやすらふ人もなかれ

宇治入道前関白家歌合に

相模

五月雨ハおそくすく郭公よふかく鳴てあけはけるよ

題しらす

前大僧正慈円

時鳥まさりとなりふ五月雨のくものたえまの村雨に一声

郭公の空もあやなくいそくなるよ

橘俊綱朝臣

五月雨きくとも見えし足引の山路よ雲乃かよひ路のさくこゑ

源師賢朝臣

五月の雲にはれとてさこそかゝるらん足引(かくこえす)の山とよりいそく乃五月雨の頃

百首歌よ　後京極摂政前太政大臣

郭公なほ行てあきらめんをのつきの月のありけん

前中納言師仲五月晦日人々いざなひて右近馬場よ

まかりて時鳥まち侍けるに

祐盛法師

ほとゝぎすはつねをはつかに郭公をきゝつる月もつれなくやあか

堀河院御時きさいの宮にて同五月郭公といふ心を

よみ侍けり

権中納言師時

雲路よりかへりも尾上の次時鳥しらべにかよふ声ぞ聞ゆる

俊頼朝臣

尾上やみえきなけみえし郭公さ月ならぬもきかばかり

題しらず　よみ人しらず

夏の月の光ともいふかしてよそにもなる下けり

覚盛法師

草葉をばあまさぬ尾上の松風吹きてぬ八重雲たちぬめり

家に五十首歌読侍けるに

入道二品親王道助

あつき日の露のしたりの風にまかせて秋風たちぬる雲のかた

参議雅経

難波がたすゞしもうすき夜のあかつきは水にてたえし月の影
外

法成寺入道前摂政家歌合に

参議脩範

夏乃夜ハ雲路ハことく盛まて遊かてゝ月はよらなる夜半哉

夜月を読侍りける

正三位経家

秋をまつ庵りの水の涼しさに月も夏をやよそにみるらん

題しらす

如願法師

明ぬるか木末さりまく月影のひかりもうすれ蝉乃大家

石山ゆく暁日くらしの鳴きて

藤原実方朝臣

大淀之はこし山乃はや風ふくらんおく露もしらぬひとの風

寛喜元年女御入内屏風　桂亀山井　流水ある所

正三位知家

出宿ハ宿より外と捨ても身のなれハこの世の梢すゝしけそ涼し秋

海辺松下行人納涼の所

正三位家隆

夜衣ゆくてもすゝしあつさきハ亀山の松乃下風

六月祓の所をよミ侍りける

後京極摂政前太政大臣

みそきせのうき瀬ハかにこ祓して年もなかはに入ぬるハとそしる

寛喜元年女御入内屏風

前関白

芳野川河なみたかくみそきして志らゆふ花の数まさるらし

正三位家隆

風そよくならの小河の夕暮はみそきそ夏のしるしなりける

新勅撰和歌集巻第四

秋哥上

初秋の心を読侍りける

曽祢好忠

久堅乃岩戸乃関もあけなくに夜はに吹しく秋の初風

大納言師氏

かさゝきのゆきあひの橋乃月なれは猶わたすへき日こそ遠けれ

大納言師頼

昨日にはかはるとなしに吹風のをとにそ秋は空にしらるゝ

題しらす

西行法師

むすふ手に露はこほれてむすひし野辺乃草むらのたひの袖かな

正三位家隆

荻のはは見えぬ雲まて来るものは形なき物にふれて秋をしる風

右衛門督為家

荻たてゝ雨さへ吹ぬる宿の萩のうへ葉の秋のはつ風

うき色をしることも初風の心をたけうまつりける

藤原資季朝臣

あけ方の山おろし風のいほのまにまをさて吹くる秋さへぬらん

家に百首歌よませ侍けるに早秋のこゝろを

関白左大臣

夏すゝし竹やいくよに成ぬらん夜はまたしらす秋来ぬ風

内大臣

あまつ風吹まよふ夕暮の雲のけしきに秋はきにけり

藤原信実朝臣

しら浪の深くもあらぬ秋風の袖のうら吹秋風にさそ

千五百番歌合に

宜秋門院丹後

さ夜ふかく袖のうへにも露をしるかな秋はきにけり

法性寺入道前関白中納言中将に侍ける時家に秋

こゝろをよませ侍ける

菅原在良朝臣

山里は萩の上葉を吹風の秋くるよひを知られぬれ

殷富門院大輔三輪社にて百首歌人々によませ侍
りける秋歌　　土御門内大臣
秋とたにとのゝ色もかきりありけりみなれしもしらしをとゝ
聞そ涙　　曾祢好忠
はらゝ麻生の男乃原をしのきつゝ山かくれけ秋風そ吹
　　後徳右大臣
ゆふ霧はむすほれたる絹の床に家あれとまちわたるらん川風
ひこ星の月あひをまつ久かたのあまのかはらに旅風そ吹
　　殷富門院大輔
鵲のわたせる橋をよそにみてまちわたるらんよはの月かな

百首歌よみ侍ける時　　崇徳院御製
あまの河八十瀬の浪もむせふらん年まちわたるかさゝきの橋
　　法印慈円
天川まつらひぬる秋風にまちけん中やたえなん
清輔朝臣家に歌合し侍けるに七夕の心をよみ侍る
　　藤原敦仲
あまの河うきたつ浪に数ふ星の妻むかへ舟はいまやこくらし
後三条院御時上のをのこともに秋院にて七夕歌
よませ侍けるに　　権中納言基長
なかなかにたえまやなにかせむ七夕の一夜をちきりけん

法性寺入道前関白家にて七夕の心をよみ侍りける

菅原在良朝臣

銀河あふせの霧もみえわたりたちわたりて秋風に秋霧

宇治入道前関白家にて七夕の心をよみ侍りける

権大納言経輔

七夕の昔や逢ことは年に一夜と契りそめけむ

百首歌よみ侍りける秋哥

正三位家隆

草のうへの露とるけさの玉章にかきつくしぬる梶の葉の露

七夕後朝の心をよみ侍りける

権中納言伊実

けさよりの天の川なみたちかへりこの暮はかりいかてわたらん

藤原清輔朝臣

天河水けは草にいとく露やあかぬ別れの涙なるらん

八条院高倉

むつこともまたつきなくの秋風に七夕つめや袖ぬらすらん

前大納言隆房

今さはの小舟の一瀬をも絶えなくもあかなく渡る星合の空

百首歌の中に

式子内親王

秋とたにえぬ物をとてたゝ西山のこなたには雲もかゝる夕暮

二条院讃岐

今よりは妹の㝡(?)をいかにとも萩の葉すゑに問ふらんさ

秋ことて読侍りける　入道二品親王道助

萩乃葉に風の音せぬ妹もあらハなすてふ我身月のまま

入道前太政大臣

秋萩の葉末に吹とふきぬなる秋風の流れをまづ驚かれ

題しらず　次　相模

いかにして枕ならぶる柄よハ妹なら我身の行を河顔人

大納言師氏

三る露に草葉よりなく秋の夜の露分毛すいしのの松

秋歌読侍りけるに　左近中将公衡

よもの山の端をそれ月影おちらさりの霧よりも出ぬ迷

藤原教雅朝臣

かよひてしけふハなにをかもさらすよ秋よそ人を松虫の声

之乃をけにことも隣家萩としひ事をとたにいふうまでもなりけり

権中納言隆親

毎年と宿乃籬乃葛をそれからしけなるあさ萩が花

題しらず　読人しらず　次

白露乃をりしもとて萩がもとしきさへ衣はうつろいの妹はいとしく

このしら妹をさむきに霧の花ちらむ波路の露を袖なりけり

あすか河ゆきゝの岡の秋はぎはけふふる雨にちりかすぎなん

柿本人丸

しら露と秋の花とをこきまぜてわくことかたき我心かな

祐子内親王家小弁

さゆりの露きえこゆふり色木野風もそ吹ゝのこ萩を彼[illegible]

白河院にて野草露繁といふ心を人々

つかうまつりけるに

大蔵卿行宗

すり衣萩のはなずり露ふかみうつろふ色にそほちゆくかな

家に秋歌よませ侍りけるに

鎌倉右大臣

道のべのをばながもとの夕霧にかゝりみだるゝまさ萩のも

とのみぞわけて小萩はいかに見る人なしにさきかちるらん

藤原基俊

しら露のおく萩ながらをりしも朝さかぬ日はなし

雲居寺瞻西上人歌合し侍けるに

権中納言師時

ぬきとめぬたまともみえて萩のえにうつる霧のこぼれてぞ見る

権中納言経定家歌合し侍けるに積萩といふ心を

按察使公通

女郎花もしらぬ野しもかいもなくなにはさにいりぬ秋の野風

題しらす　　　　　　　二條院讃岐

さつまさて振捨をハ女郎花ひとりや野へに露けかるらむ

菅家万葉集并

名にしおはゝしゐてたのまむをみなへし人の心に秋はくるとも

式部卿敦慶のみこの家に人々あつまりてあそひける

と云侍りけるに女郎花をかけてよくよみ侍ける

三条右大臣

女郎花たをる手にうつ白露もむしのしのふやぬるゝ袖哉

久安百首哥奉りけるに秋哥

左京大夫顕輔

白露もこほすゑ野の白萩を宿る露ハむすふとやかくるらむ

題不知

権中納言長方

ゆふ波そてあさにハ[illegible]しも露まとひて人まつ虫の声見よ

参議雅経

萩か花[illegible]風たゝかりそめに[illegible]の露やをき所なる[illegible]

源具親

さらぬ草の袂もさらぬ薄露けしなかぬ鹿のさきにいりけり

閑庭露といふ心をよみ侍ける

藤原信實朝臣

さし移そこう[illegible]庭の一もとしこそれぬ庭を荒れはてぬる

深庭萩をよめる　藤原成宗

いく秋の風のやとりに成ぬらん跡たえはてる庭の萩はら

題しらす　前大僧正慈圓

ぬしはたれ遠き野中の庵まける籬のもとの下に鶉なくなり

よみ人しらす

おほかたの猶たちこむる秋霧にたちへたてゆくあさたちの花

月の行方もしら見ん侍るか

後京極攝政太政大臣

しら雲ハ夕かゝる山のをちこちに月をむかふるまつの嵐に

權中納言經定中將に侍ける時家會に續

てらはいしきる月か

大炊御門右大臣

あまつそらちる雲はらふ秋風にくまなくすめる夜半の月かな

題しらす　正三位家隆

更科やをはすて山のこのまより月のかけこそはれゆく月影

延慶三年時八月十五夜月翫合

源公忠朝臣

いにしへもあらしとかみぬ秋の夜の月のかけにしくはあらしな

長和の比ほひ百首歌よみ侍ける

權中納言定家

ふる京たゞ人ハかたぶく色もかし姨しぬ月のひかりぞあはれなれ

家に百首歌よみ侍りける月前

関白左大臣

をしほ山のはやしにハ雲消てえしら見ゆく秋の夜の月

月前とて讀侍りける

藤原資季朝臣

みるまにハ色そかはりゆく久堅の月のまつれ姨のかみち梨

八月十五夜よみ侍りける

寂蓮法師

あまつ風思ひの外を行月よ何よりふかく浦見て

登蓮法師

かゝる人稀に秋の夜を経てわかちよいほ見る月影道

後京極摂政左大将に侍りける時月前草花をよみ侍りけるに讀る

権中納言定家

あけぬる夜の姨のかくも色はへしかくて月の行さのは

月前よみ侍りけるに

左近中将基良

山のはを出る未ハいつやありつらん空よりほのかなる月影

権律師玄畝

いたくなみ見ゆく雲ものこるむ風まつ出山のはの月

中原師季

ゆらえても白露とむつ経てかれ山のはあけゆくいつの月影

長明法師

袖のうへに露をきそへしよもすがらたれまつ虫の鳴やすらん月は

関白左大臣家百首歌よみ侍りける月を

藤原頼氏朝臣

分ぬるも秋はけふ風露の袖のうへに足しもの秋の夜の月

入道二品親王家に五十首歌よみ侍りけるに山家月

正三位家隆

松の戸をとしめてし山風に雲もかからぬ夜半の月をみるかな

文治六年女御入内屏風に駒迎の所

後京極摂政前太政大臣

あふさかや杉まの山こえてけふ都にいそぐもち月の駒

和歌所歌合に海辺秋月といふ事をよみ侍りける

小侍従

たえ河風吹けば見えぬ浦まよふ浪のよるともみえぬ秋の夜の月

百首歌月を

前関白

むら雲の峯にはらひしづまりて山のはいづるはつる月影

うら風をみしここも海辺月とひとつにすむやとつらし

宇治の浪よ

御製

わかの浦やへのしほ河の嶺よ秋の月の影ぞさえける

秋のよふけにけり

正三位家隆

波ノの(?)浦まれ海と秋(?)の衣よりや霧(?)かけて風かよふ月もたちぬ(?)欤

名所月をよめる　藤原光俊朝臣

明石かたあまのたく縄くるしとも思はで秋の月をみるかな(?)

白河院鳥羽殿におはしましけるに田家秋興といへる心を(?)

へともなのこともはてけりまつりしよ(?)

権大納言宗通

志川のあれ門田のいなばかりふきたえぬるもあはれなりけり(?)

題不知　藤原道信朝臣

いとゞしく物思ふ宿を霧こめてながむる空もみえぬなりけり(?)

前大僧正慈圓

秋すにいとゞかなしや煙(?)立ちいくあさき霧たつ山田(?)の(山)

あはれなる(?)物思(?)も霧にへだてぬる海の苫屋の秋の夕暮(?)

海霧といへる心を　正三位知家

煙(?)こしにしほやくともみえぬ夕霧に猶たちそふるのあき風(?)

題しらず　正三位家隆

梢にはみしともみえず竹の葉の山嵐にもみだれたる霰(?)

西行法師

をくら山ふもとの里にこのはちれば梢にはるゝ月をみるかな

新勅撰和歌集巻第五

秋歌下

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

秋の夜のあまてる月のひかりにはおくしら露を玉とこそ見れ

九月十三夜の月を独なかめて思出て侍ける

能因法師

さらしなやをはすて山に旅寝してこよひの月を昔見しかな

題しらす

小野小町

なかの月は秋のものそ我心のみかともなきよをなかにすむ

あかつき月おもしろき夜よみ侍ける

選子内親王家宰相

秋のよの露をも玉とぬきとめてなからのこる山の端の月

くまなき月をなかめあかしてよみ侍ける

道信朝臣

いたつらになかめはすくしと秋の夜のあけかたちかくなりにけるかな

対月惜秋といふ心をよみ侍ける

菅原在良朝臣

月ゆへもなかりし秋すくる大方も過ぬとおもふ秋のそら

秋の頃よみ侍けるに

侍従具定母

うき世をは旅のすゝき葉に露ふかみ月よそれにやとれる袖の月かな

按察使兼宗

よるの月のひかりのさやけきは尾上の萩葉に露や置らむ

左近中将伊平

三室山さゝ葉をわけておく露よ木のしたに月の影そやとれる

百首歌中に

後京極摂政前太政大臣

大井川木の下にしてありあけに秋風ふかみ月とふるかな

建保六年秋歌奉けるに

参議雅経

身をは秋のこの世やいとゝふけぬらん月をそのこすやハ待としもなけれ

正三位家隆

限あれはなかむともすゝ鏡の影にかはらぬ秋の月かな

入道二品親王家にて五首歌よみ侍けるに

権大僧都有果

風はらふ月ハ光そさえまさるよもの草葉に秋の霜置く

後京極摂政百首歌よませ侍けるに

小侍従

いくとせかそれゆへ秋に逢ぬらんかはらぬ月の影をなかめて

八条院六條

秋の夜は物おもふことにまさりつゝいとゝ露けきさよの袖

野の秋人くもかりしにたえぬて物ぞ思ひ行き

哥よ　　　京極前関白家肥後

野乃秋をばかりしくて暁乃露とおきぬるそての袖ぬれ

ここ[illegible]のたかれこともとも秋十首よみけるに

太宰大弐重家

かく思の枯ぬ木葉もみなはては子思とし秋はきやまし

寛平の時きさいの宮の歌合の哥

読人しらず

かく衣世とたりとの露けきは誰秋よりまさるなり

題しらず　　　人麿

秋田もるひたのいほりに時雨ふり我袖ぬれぬほす人もなし

躬恒

野あかれ紅葉の色のくまなきは小倉の山の麓にはべりて

吾妹元良のみこのとこの山辺にはべりけるに

きの家を見にまかりて書つけ侍りける

少しこ

こりふのこゑきゝつゝ出て鳴声の山は秋はてぬ来

題しらず　　　中納言家持

あき萩のうつろふかしらなく鹿のこゑきく山は紅葉しにけり

猿丸太夫

雲ゐなる木すゑをかくす霧こめて高間の山に鹿そ鳴なる

前大僧正慈圓

むかしよりきゝしもしるく秋なれは然もなくさむ谷の声
云合しぬるや小鹿をともとなりける

参議雅經

庭まよふ鹿のねちかくきこゆ也萩吹みたる秋の山風

建保六年内裏哥合秋哥

八條院高倉

わか庵ハをくらの山のちかけれハうき世をしかとなかぬ日そなき

鹿乃声をきゝて読侍る

權中納言實守

大江山こえてゆくの末をそき鹿乃音ハいく雁をもつれて声をこふらん

建保五年四月庚申五首哥秋朝

六條入道前太政大臣

大かたの秋をは秋となく鹿の声たかくらし野への朝霧

澗底鹿といふ心をよみ侍ける

正三位知家

世にしられぬ谷の埋木にけふみをなす声をきくらん

題しら須

如願法師

棹鹿のなくねもいたく深くなるあらしの小倉の峯の清月

後冷泉院みこの宮と申ける時梨壺にて[illegible]

なれし色をけふの月みる秋はうつしとめける玉の菊哉

大貮三位

いはまもる泉の内にうつるさへ月影に色みえて匂ふしら菊の花

湖に霧たちわたるにこれやこの月の光にうつる浪かとよ

作者名もれたり読侍ける

權大納言長家

月影はなりゆくまゝにしら菊はうつろふ色やかはるなるらん

康保三年内裏菊合に

天暦御製

かきみてて汀ゆたけき白菊はをりまつ波の花とこそ見れ

崇徳院月照菊といふ事をよませ給ひけるに

河影に色もかはらぬ白菊はさしもおもてにそ折るへかりける

右兵衛督公衡

按察使公通

月かけにかはらはをしらしおく色いまはしらぬ白菊の花

月前菊といふ心をよみ侍ける

徳大寺左大臣

かさねてをる袖の月影ふけゆけはのこりの菊は花なかの露

題不知

入道二品親王道助

我宿の菊の朝露色もをしこゝろをかへて庵の松風

秋の歌とてよみ侍けるに

權大納言忠信

なかきよもゆきてはまぬかる初雁のかみさゆるこゑをきくかな

鎌倉右大臣

わたの原やへの塩ちにとふ雁のつはさの浪に秋風そ吹く

西行法師

月ゆなく庭の秋風のさゆる夜に霜わかそゝくうつ衣かな

恵昭法師

あらしふく遠山のおろしさ夜ふけて里も秋をく月にうつなり

擣衣の心を読侍ける

曽祢好忠

衣うつ砧の音をきくなへに霧たつ空に雁そなく也

貫之

からころもうつ声きけは月清みまたねぬ人をそらにしらるれ

久安百首哥奉りける秋哥

皇太后宮大夫俊成

衣うつひゝきは月のなになれやさえゆくまゝにすみのほるらん

百首哥奉りける秋哥

入道前太政大臣

風さむみ秋をかさぬる寝覚にはこゝろにかゝりて夜更てうつ衣かな

前大納言隆房

今こむとたのめし人やいつかたの月はなくなく出るもうら也

題しらず

承明門院小宰相

月のいろもうつろひゆく見ゆる野風にひとつに衣うつなり

月前擣衣といふ事を　後京極摂政太政大臣

むらさめの秋さむきよはたれかの月をみるらむ遠さとの声

秋夜擣衣といふ事を　権大納言家良

さらしなの月のひかりにしらくもをいくへの里に衣うつらん

正三位家隆

白妙のゆふつけ鳥もなきわびぬ夜やふけてそれ山もとの霜

建保二年内裏歌合秋歌

手向山もみぢの錦ぬさはあれど猶月かげのかくるゝぞうき

百首歌中に　前関白

まれにゆふしたへの草の露ならばよにてか月のやどれる

五百番歌合に　正三位家隆

あきの風吹よはるかにおとたかき山かみのあらしの音にまかせて

題しらず　藤原信実朝臣

因幡山てらす風さむき夕の月影はこよひのつきをまちしまとふ

百首歌奉りけるに秋歌

入道前太政大臣

秋の色はうつろひゆくをかぎりとて袖にしぐれのふらぬ日はなし

参議雅経

秋のゆく野山の浅茅うら枯て峯にわかるゝ雲そさひしき

題しらす　　　　鎌倉右大臣

雁なきてさむき朝けの露霜に矢野の神山いろつきにけり

西行法師

山里ハ秋のすゑにそおもひしるかなしかりけりこからしの風

中宮但馬

いくとせの時雨に秋はしほれつゝ雲井の紅葉よのつねの色ならさらん

藤原伊光

紅のやしほの岡のもみち葉をいかにそめよと猶しくるらん

建保二年秋歌奉りけるに

内大臣

みむろ河秋ゆくみつに色そへて紅葉おろす山風に時雨ふるらし

参議雅経

おく露の色ましにはあかぬ錦さへ田のもそれにそ深るらん

僧正行意

こゝろ宿ハかつらきの山のもみちはに朝ゆく雲の跡そふりぬる

後法性寺入道前関白家歌合に紅葉をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

時雨ゆく色さへたにやとを紅葉くの梢はくまなく色に見えそらん

百首歌中に

式子内親王

秋しれとまたくらされぬ杉乃戸をいくへもこめてよる嵐かな

関白左大臣家百首歌よみ侍けるに

権中納言定家

しくれて袖たにほさぬ秋の日にさこそみむろの山はそむらめ

従三位範宗

錦しくまた深からてゆふをくら山やみねの嵐の紅葉

題しらす

西行法師

限あれはいかゝは色もまさるへきあかすしくるゝをくら山かな

千亀乃をよこともも秋十首に侍りけるまつりの添に

権中納言隆親

時雨ても日にそへて染まさるらし三室乃山の峯のもみち葉

題しらす

法印覚寛

深のこ須猶もあらしも時雨にもあかぬくの山のかな

建保四年右大臣家歌合に古郷紅葉をよめる

正三位家隆

古里はみかきか原の紅葉さへうつろふ世の秋の末かな

文治六年女御入内屏風に

後法性寺入道前関白太政大臣

まきもちるもとのやとの梢よりけりて盛しらす秋ならぬかれ

後徳大寺左大臣

木のもとは風吹く色せかね錦たちきる人のみもしらせん

左京大夫顕輔歌合し侍りけるに紅葉をよみてつか
うしける

権中納言師忠

あらし吹くきしの山かけにみゆる紅葉はいとゝ紅の色そこき

家に百首歌よませ侍りけるに紅葉の歌

関白左大臣

たつた河みむろの山のちかけれは紅葉を浪にそめぬ日そなき

後京極摂政百首歌よませ侍りけるに

小侍従

をしなへて峰のもみちやちりぬらん見るもはるかに嵐はけしむ

秋の落葉の歌

祐子内親王家摂津

ゆく秋のあとの山風さえみねの紅葉はいくらやのこるらん

権中納言実有

木枯の山をこえてちる紅葉を川瀬の秋と流るらん

参議雅経

嵐ふく紅くゝるたつた河せゝの浪も色かはるらん

九月盡によみ侍りける

入道前太政大臣

わかるゝは名残をとゝめかねてしもおしむ心そ嵐なりけれ

八条院高倉

色そへぬ時雨は長月有明の月のかけ(?)のあさき風(?)に寝(?)る

新勅撰和歌集巻第六

冬哥

題不知　　大伴池主

神無月しくれにあへるもみち葉のふかはちりなむ風のまにまに

相模

何も移りはてぬる神無月しくれはかりそ時雨なりける(?)

清原元方

をといへや神無月には風よさむみ波のおとさへさえまさりける(?)

大納言清蔭亭子院賀のさま長月の菊のはな(?)よ

ト付ていろいろにいひなしてそれ色(?)もある事すれ(?)

さらに秋の月のさかりにはしはしの
ゆうしこ
今はよといそぎし物は色にいでゝ河辺によそぢ深きじ
題不知
曽禰好忠
露はらふ袖にやどれる月かげはみかさの山にふる時雨とも
前中納言匡房
から錦むかしのことは紅葉や秋のかたみにみえし夜なるらん
権大納言宗家
秋ふかく嵐のふく夜に見えつる錦をちらす物はあらし吹風
後朱雀院御時大井川にまかりて
紅葉浮水といふ心をよみ侍りけるに
右近大将通房
散る色の水に浮きけるかげみえてゆくとも見えずゆく紅葉かな
九条太政大臣
大井河ちる紅葉の錦をは浪のたちかへりみえつゝ
後冷泉院御時殿上人大井河に罷りて紅葉を
中納言資綱
ちる紅葉かゝる浪たに見るほどに大井河のながれはわかぬ色
白河院御時大井河に人のまかりて月前落葉といふ心
をよみ侍りけるに
橘俊綱朝臣

冬の夜の月すみわたる木枯に吹く雨はもみぢなりけり

題しらす　入道二品親王道助

木枯のすさみ吹しく庭の面に露ものこらぬ秋の名残

千五百番歌合に　大蔵卿有家

霜さゆる人めもいまは枯はてゝ松にいくる風のこゑかな

建保五年内裏歌合冬山霜　正三位家隆

龍田山よそにや河こゝ夕霜の色みぬほとき嵐ふけせて

冬暁月　藤原信実朝臣

すまの浦に秋をとゝめぬ関守ものこる霜夜の月はみるらん

法性寺入道前関白内大臣に侍ける時家歌合に　権中納言師俊

霜むすふ霜夜のかすみさえまさりてや氷ゐるらん

延喜十三年十月法皇御屋の水のほとりの菊を翫て
遊侍ける次によみ侍ける　延喜御製

みな底にかけをうつせる菊花波のをりかと色もみゆらん

源公忠朝臣

冬く霜に色深かゝてさはらつ菊のさかりは空にみえける

雲に出て時雨しける日宮式部卿許に遣しける

上東門院小少将

雲まなくなりゆくそらのかきくらしいかにふりつる時雨なるらん

とし

紫式部

ことはりの時雨の空ハ雲まあれとなかむる袖そかはくよもなき

山路時雨といふ事をよみ侍りける

源師賢朝臣

袖ぬらす時雨なりけり神な月いこまの山にかゝるむら雲

冬の歌よみ侍りけるに

右衛門督為家

冬きてハたゝ時雨の雲の絶まより[illegible]

正三位知家

時雨にはつれなき木葉もなかりけり山ハミかさの名のみなりけり

法性寺入道前関白家歌合に

源兼昌

夕されハ入さの山の嵐にはたまらすすくる時雨なりけれ

前参議経盛家歌合し侍りけるに

藤原元重朝臣

山の端に入日の影ハさしなからふもとの里ハしくれてそ行

平恒正朝臣

建保六年内裏歌合冬のうた

むら雲の風ふく山の[illegible]の里

前内大臣

秋の月さくまてにいつるかちる山の端に飛もあかつきまて

題しらす

前大僧正慈鎮

涼しきはやとりさえて橋ひめのかたしく袖は嵐なりけり

月絶て秋の名残を惜みし夕暮に末葉吹こす山下風の音

前大納言忠良

雁の色ハ有明の山の端にしに月のかけそ残りてつれなき

殷富門院大輔

見わたせは二日まてたつ浪のきはの浮雲に染む氷

正三位家隆

此宮の庭のはしもなかく枝桜のかけに霞める春の花

千五百番歌合に

冬枯のひさすふかうの末の冬もよふ絶て吹くるまくつの風

百首歌よみ侍りける冬を

参議成實

さやけきは霞の袖にむすひける夜の月をみむろの山の明かたのそら

建保四年百首歌の中に冬を寄

前関白

岩たゝみ瀧津河なみ吉野にて音のみや秋にかよふらん

式子内親王

題不知

咲むすふ露もたまにちるまて松にも風の秋をしらまし ぬ
なち野川岩きりこし音水も冬はつれなくなやむらむ

関白左大臣家百首讀侍けるに冬とよめる

中宮但馬

冬の夜はさ寝くらせは髪のみたれさ秋に瀬の水むすひとめて

頭白く候

西行法師

風ふけはよするさゝ波八重をそて水はしかつかのなみこえて志賀のうら

寛喜元年女御入内屏風湖邊氷結

内大臣

志賀の浦や氷のひまをゆく舟よ涙も道あるよとやみるらん

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

冬の夜はあさきか宿に見はらして霜夜ちかくに霜の月影

二條院讃岐

うらさえて冬はさかり長き夜のふけゆくまゝの月

久安百首歌奉けるに冬の哥

皇太后宮大夫俊成

月清み千鳥鳴なりたつ風ふけひの浦の明かたの空

千鳥を讀侍ける

権中納言國信

友ちとりむれて浦よりわたる也沖の白洲に鳴やらん

源顕國朝臣

風ふけは難波の浦にうつ浪のよるさへ波のたちぬれけ

千五百番歌合に　源具親朝臣

さ夜ちとり湊吹こす塩風によるもかのみなとをそなく

題しらす　鎌倉右大臣

風さむみ夜のふけゆけはいもかしまかたみの浦にちとり鳴也

寛喜元年女御入内屏風山野雪朝　前関白

年ふれと松の雪をあつめてや花はいつともみえぬ雪かな

内大臣

あらたまる年の千代のはしめとや雪にも山はさえける白雪

題しらす　権中納言長方

霰ふる夜の寝さめの床まても雪にまかへる月そさひしき

立木ひく杣山人も絶ぬらし杣は初雪ふりしきて

冬の歌よみ侍りける　後京極摂政前太政大臣

河ひさは河もなかめぬ庭に雪れとさえまの霜の衣の

ちりしくはうつもれぬ山の梢にもあらはれて雪は時なくそふる

鎌倉右大臣

山たかみあけはなれゆく横雲のたえまにみゆる峰の白雪

正三位家隆

明わたる雲まの星のひかりまて山の端さむし峰の白雪

建保五年内裏歌合冬海雪　八條院高倉

里のあまのさためぬ宿もうつもれぬよするなきさの雪のしら浪

正三位家隆

わたのはら八十嶋しろくふる雪のあまきる浪にまかふつり舟

高陽院歌合に　康資王母

春見てけの峯の梢はしられけりふるにまかする吉野の白雪

題しらす　曽祢好忠

ちはやふる神南備山におりてける葉を雪ふりさけて見る山人

堀河院に百首歌たてまつりける時　基俊

おく山の松の葉しのきふる雪は人のかよひのあとやたえなん

正三位家隆

ふるさとや見人たのめの松山をこえてよそも雪にうつきぬる

賀茂重政

ゆきそへて此松原の山も雪とらて三芳野の雪は谷に埋れし

二月はかりに侍ける法蓮法師大原にすみ侍けるに
つかはしける　西行法師

大原やしはふる根のちらけるは宿のかよひちたえてやま
影しら浪　刑部卿範兼

玉桂みかける光もみえなまて世の名残ハ雪降にけり

清輔朝臣

雲ゐゆく月もさやけき白雪は久方の月のかつらの花ちるらん

百首歌中ニ

前関白

いにしへの吉野の山を世にたえて雪のふるさと山路をハ月影

関白左大臣

をとめこの神つかふ雪ふる梢よし野の雪ハさえぬほか

冬月を讀侍ける

左京大夫顕輔

雪ふかくしらしみ山の木梢も花とみゆるさえて見ゆる月影

建保六年内裏歌合に冬歌

入道前太政大臣

花さそふ山路はいまも旅人のふみわけかぬる白雪

参議雅經

三吉野すれ野も埋れけり雪ふる山のふもとのみちしら雪

関白左大臣家百首歌よませ侍ける中ニ

参議成寶

ふる雪の道の山路の雪ふかく中にいふ道もたえぬる山路の椎柴

古渓雪を讀侍ける

中宮大夫通方

谷ふかく岩ねの道もたえにけりたれかは雪をわくる人そなき

家歌合暮山雪といふ事を

前関白

霜やこれ日影もさむしみかの三室の山の松のこすゑ

哥合に寒松燈火といふ事を

嘉陽門院越前

枝さむき里の袖にはしらし山松の下雪あるをそれとみるらむ谷のけ

後京極摂政家哥合に

藤原隆信朝臣

いつ見ては冬にしまさる露も松しも風のおとさへかはるらん

題しらす

鎌倉右大臣

武士乃八十うち川をゆく水の流てはやき年の暮哉

五十首よませ給ける時歳暮といふ心を

入道二品親王道助

ゆく年をやなきつみてもとゝめさらん浪のよとまぬ水はあらしな

正三位家隆

はかなしや袖の別の名残なくてたのむもいとゝ年の暮哉

西行法師

飛鳥川かはる淵瀬もある物をせくかたしらぬ年の暮哉

題しらす

大納言師氏

百年の大宮人もむかへつるはしきとしやよをやゆかしかるらん

貫之

かつ君とゝ見にぬきとめて人のもつの玉はさくらの年は達え

新勅撰和歌集巻第七

賀哥

貞永元年六月きさいの宮にはしめて
鶴契遐年といふ題を講せられ侍りしに

前関白

鶴の子の又やしはこのすゑまてもふるきためしを我世とそみん

関白左大臣

久さかのそらにも鶴の契をや幾代のためしにかそへしあかな

寛治八年八月高陽院家哥合に月哥

周防内侍

はるかなる三笠の山の月影のひかりはくもらさりけるかな

秋の色をよめる　　藤原隆信朝臣

てらしきし六代の恵もふかみさの山の松はうこかさらまし

百首歌よませ侍ける時秋歌

後法性寺入道前関白太政大臣

八幡へん君かためとや玉椿葉かへもせぬはかはらさらまし

大宰大弐重家

むかしにも過ける御代の恵もさしてよろつ代を千世になるらし

堀河院御時松不改色といふ心をよませたまふに

富家入道前関白太政大臣

みつのゆくまつのことのはちよのゆくすゑとほきよはひなりけり

長保五年左大臣家歌合に　　藤原長能

君か代の千世の松のふかみとりさはかぬ水にかけはみえつゝ

題しらす　　実方朝臣

枝のさしは春日の原にひめこ松いつのまにかは千とせをもへん

天徳二年右大臣五十賀屏風

清原元輔

よろつ代のはしめの行すゑかそへてそ春のはしめのためしなりける

勅使にて斎宮へまかりてよみ侍ける

中納言兼輔

呉竹のよゝのみやこと聞からに君はちとせのうたかひもなし

一品康子内親王裳き侍けるに

元忠朝臣

乃れ人のいそとせの松に千代のなかしもとにいなりらむ

天暦御時みこたちの裳き侍りけるに

中納言朝忠

大原やをしほのこ松葉をしけみいとゝ千世のかけとなるへき

題しらす

よみ人しらす

うれしさを昔は袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬるかな

長元六年関白白河にて子日し侍けるに

権中納言顕基

千世まても色やかはらんきみかさかゆくすゑの松の緑は

永治二年崇徳院摂政法性寺の家にわたらせ給ひて松契遐年といふ心をよませ給ひけるに

大炊御門右大臣

うつし植て君か宿の姫こ松いく世ふへき梢なるらん

後白河院御時屏風に名所よみ侍りける

権中納言長方

秋しのやいはまの松はときはなるらんしむ代々のためしなりけり

仁安三年摂政関白家にて對松争齢といへる心
を読侍りける
権中納言兼光
うゑしより松のみどりも君が代もまたぬ千とせのかぎりしられね
建仁三年正月松有春色といふ題を人々に
よまれけるに
前左大臣
小塩の峯の松のえも老ぬれは千代の色やみさをならん
浮初はたつまつのくらゐなりしをのへ侍りける
権大僧都良算
引てなほしけさてはかのよの代は千とせもかさぬる
老波の老のそらしめよと見侍りける
入道前太政大臣
春はまつ子日の松に君か代も千とせしふ我を人やひくらん
寛喜四年閏三月中殿にて翫新成桜花宴
堀川右大臣
言ふそみつむかしの春もけさ春にあまりの匂ひをそ
権大納言信家
ちとせとも老しなれけさ君か代にちよなかし見花をみ
寛喜元年十一月女御入内屏風京も人家元日書
同所
前関白
たつ春の花をむかへて松とゝもに民の戸ことに千代をこそまて

江山人家柳といふ事　入道前太政大臣

春かはにたてくや江のむ柳いり江波にみだれあひくまさく

池辺藤花　正三位知家

春日の野辺の藤のしたかげ色みえてあやしにさけの宿の池水

四月山田早苗　同大臣

み山田やそりいそく早苗よおもしくふる代の杖をれねよろ花の

八月山野麻といふ事　前関白

いまよりはそれかしらよ春日山様はや秋なる麻の袖

人家暁月

よろ前の花をふるくもかれよろ月かげいかなるのあかれしと

田家西収興

今年は秋のゆたかなるいなりたてく民のたのむ日そおほき

入道前太政大臣

橋たえく末のよそしの秋よかり田の稲もおほくつむ也

前後院行時中納言任じ慕たまへつるよけ

よきしにまの額よ出入くる激かにすめるせ給ふよ

小野宮右大臣

萬代を頼みまゐりつつ鳴きつれる小松の松もしたがへ

九月九日従一位倫子菊の綿にてたまはりて老のそひぬで

よみ侍けるに　紫式部

菊の露わかゆはかりに袖ふれて花のあるしに千代はゆつらん

菊をよみ侍ける　元輔

わかやとのきくのしら露万代の秋のためしにおきてこそみめ

康資王母

長月に匂ひそめにし菊なれは霜もいくたひおきかへるらん

後冷泉院御時残菊映水といふ心を人々

よみ侍けるに　権大納言長家

神な月のこれる菊は久しき秋の色そみゆる

寛治三年大井河に行幸の日よみ侍ける

大炊御門右大臣

大井川ふるき流にすみなれて千代もかはらぬ水の色かな

前中納言伊房

おほ井河流をちよのためしにてすむへき御代はたえしとそ思ふ

寛元々年女御入内屏風十月汀邊葦鶴

立　入道前太政大臣

千代ふへき難波のあしの世にたちて霜のふりそふ鶴の毛衣

泥絵屏風石清水臨時祭

権中納言定家

萩もせし夜にすむ月の行末の千とせはかさす袖にしるらむ

承保元年大嘗會主基方丹波國ふるの山

江中納言匡房

久かたの月のかつらもふる山人も心よりあかるかなしよすゝなる

寛治元年悠紀方近江國三村乃山

時雨つゝ見し人も此宮さの紅葉ゝ八千とせのちりをき尽す

仁安三年悠紀風俗哥

宮内卿永範

天地とゝもに鏡の山たまはひとしかるさらけれみなもる

貞應元年悠紀方稲舂哥

正三位家衡

あくの草葉乃露をとて玉野のはら月みえなる

同主基方風俗哥いはを山

權中納言頼資

御かみをり玉松乃千代のかけまでもいはや山こそうごかさりけれ

同屏風哥いくよ山

あさ日やいくよ山の日影草かさねや神のみまとかけん

題しらす

讀人しらす

月も日もかはらぬ空の中にしもさらにうごきなき山のこのえ

延喜六年日本紀竟宴哥譽田天皇

西三條右大臣

年へたかれ降雪をすて祢えさやけさ又えをくさ三四

豊浦食炊屋姫天皇

貞信公

此哥は此集より先の代々の集にも入らさりしを

天平十八年正月雪の降りて積りける日

つむ事あまた日のあひさまて太上天皇の中宮西院に御

いりて雪はらはせ給ひける時におほみきを給

ける次に奏し侍ける

井手左大臣

降雪のしろかみまてに大君につかへまつれはたふとくもあるか

右大臣の佐保の家にみゆきせられける日

聖武天皇御製

あをによしならの山なる黒木もてつくれる宿はをれとあかぬかも

新勅撰和歌集巻第八

羈旅歌

太宰帥に侍りける時府官らいざなひて香椎浦に
遊び侍りけるによめる　大納言旅人

いざ子ども香椎の潟に白妙の袖さへぬれて朝菜つみてん

越中守に侍りける時国のはらからさふせの海にあそび
侍りける時よめる　中納言家持

ふせの海おきつ白波ありかよひいや年のはにみつゝしのばん

あすの河原の宮時近江の宮に幸給ひけるによみ給ける
額田王

秋の野にお花かりふきやどれりし宇治のみやこのかりいほしおもほゆ

吉野宮に幸給ひける時
持統天皇御製

みよしのの山した風のさむけくにはたやこよひも我ひとりねん

慶雲三年難波に幸の日
田原天皇御製

あし辺ゆく鴨のはがひに霜ふりてさむき夕べはやまとし思ほゆ

読人不知

いはくにの我屋よりせんかたの浦のかたへ京よこの日よりて

くるしくもふりくる雨か三輪のさきさのゝわたりに家もあらなくに

弁基法師

まつち山ゆふこえゆきていほさきのすみた河原にひとりかもねむ

亭子院宮瀧御覧しにおはしましける御ともにまかりて日くらし野といふ所にとまりてよめる

大納言昇

ひくらしの中来るねともかなしきはひとりさひしく妹もまちて こゝろ

うちへ山をこえ侍りて

鏡述云

ゆくへをもしらてそうつる深山路にたゝもりつる来も鳴らん

大鳴のなるこゝといふ所をよく見侍りて

恵慶法師

都にはいかにくらしの影そまれなこのまかりゆくさへや小松

藤原惟規の越後へまかり侍るにはなむけし侍る

伊勢大輔

ゆふやさこしいかに待らん松夜のまにはれまを見よとおもわれしなく

題しらす

和泉式部

こしかたは金れさへ雪へそれゝ山路のなみふか

陸奥国へまかりける人に

藤原清正

三年初の別とおもへは武隈の松にかはるへく忘れし風さ

宇佐使餞に　左京大夫顕輔

立かへり又こん程はきみまつらん千年をすくる(?)けふをむかへて

題不知　道因法師

しなへたるかゝしに歌をよませなはあとはいくよのさかえなりけん

霧中暁といふ事をよみ侍りける　入道前太政大臣

旅ねして河あらき東路の馬の背に霧たちこめて袖ハぬれけり

別の心を読侍りける　源家長朝臣

わか旅ちはるゝをしのふ行末のおもかけに河ハ涙なりけり

藤原親継

別ゆくかけも心にとまる涼しさは岩清水露ならは我身そかはる

古依者よ年経侍りける時京にまかりて見侍りける

藤原範宗

暁の松にかゝれる旅枕しをりとしいて我の袖哉

權大納言忠信家歌合し侍りけるに旅恋をよめる

藤原信実朝臣

苫にけり行いそぬる旅の曉をおしあけて旅の衣に

旅の心とて読侍りける　前中納言匡房

またしらぬさいのかはに出すけり都をのかへる人よといひて

宇治宝白の馬の渡りに海のうへをかけくる秋かな

讀侍けるに

権大納言長家

秋ふかしの枕のあたりよ宿ハ人も遠ざかりゆく物もいれこまなん

秋夜乃鮮明よすゝかの関守にて振捨らと侍りに

権中納言通俊

いかくともたにこゆるむ振よりの有明のかけの露よ紅葉ちり行

関路暁鳥といへる心をよみ侍りける

権大納言公実

鳥の音よ明ぬとつけハ関もりもさゆとも人わたしてむ

久安百首哥奉ける時

皇太后宮大夫俊成

わか行人にみをやまかすらむ田河の夕暮の空

たのめたる有明の月の思ひをもくらふれハいとゝ来秋なりけり

後法性寺入道前関白家百首哥読侍けるに旅

心を読侍りける

後徳大寺左大臣

草枕むすふ夢ちハ都にてさむれハ旅の空そかなしき

百首哥奉ける時

後京極摂政太政大臣

うき枕風のよるへもたえて波のうらわかねハ夢とそこにみえ

式子内親王

あら磯の玉藻の床にかりねして我から袖をぬらしつるかな

源師光

てる月のあかりにさしもうつろひて桜の林枝ぞしらるゝ

題しらず　鎌倉右大臣

世中は常にもかもな渚こいてあまのをふねのつなてかなしも

入道二品親王家に五十首歌よみ侍りけるに海桜　法印幸清

菅ぬれてこきゆく舟の夕浪によせてかへるや花のしらなみつゞく

旅泊花をよみ侍りける　権中納言頼資

舟とむるみなとのさくら浪かけて散るもうつるも春やおしまん

正三位知家

浪かけの中のおもみて浪はそのなみかさなりて浦とはならん

桜の歌とてよみ侍りける　参議雅経

さくら花ちりかふ山もやまかぜのさくらにぞとまるなみかなしよ

顕昭法師

月の色もうつりにけりな桜花すそのゝ萩の夕露

散るを見てもてはやすもまたうしろめたなく侍りしよ

題しらず　八条院高倉

吉野山ことしもたえずさくらさくつらなる山にこゝろとまりて

志賀のうらの八重の河山を霞めども花はなほやよひとをむかへむ

建暦二年内裏詩歌合四韻中眺望といふ心を読

給ける

六条入道前太政大臣

高砂の山をもいく千歳かくれとけゆく花をとふむしもなし

建保二年内裏歌合秋哥

前内大臣

くれは又我宿からは猿のかなしはけはの萩かけら露
古郷のまとてしら波川の次あさの山をおもひ給けるま
昔のこと忍ひやは出給て読給ける

蓮生法師

いにしへの我とはしらしあさの山井の影みしあま猿は
猿の空を読給ける

前大僧正慈鎮

かへりこしはつさいその岩根をにしかまの忍の分かへもん
陸奥国よりまかり給ける人を送りて粟津まてまかりて
読給ける

禎子内親王家摂津

東路の野らの草葉の露しけみゆくもとまるも袖そ志ほれて
惟喬のみこ物しけるに小野に給て帰り給けるを
なけきとゝめ給けれは読給ける

業平朝臣

枕とて草ひきむすふこともせし秋の夜とたにたのまれなくに
難波の浦華給ける時よめる

置始東人

大伴のみつの濱乃松らよ我を待て恋ぬらし

読人しらず

新勅撰和歌集巻第九

神祇哥

延喜六年日本紀竟宴哥下照姫

中納言良時

かゝる夜下てる姫のはなさしもあまのかはこゆる之月や絲え

天慶六年日本紀竟宴哥國常立尊

中納言維時

まつしられさむらけはあむまいを経て万代まてよたゝぬ緒の

月讀見尊

源公忠朝臣

月よみのあめにみえしくまなくあまてらすけさよ我わくらはしき

天児屋根命　　　　橘仲遠

あされくて春日の光まとにしや宮移のみそてはいつの世まん

神楽らうたひ侍

けるは神の御遊めくら御前川の石ハかむともいさの末よて

ちとせはたなれ物とあつさらさゆとはさらひとたちまし

堀河院御時女房達世話給りけるに人のをみことも

来てわさとなくぬ物の花なみし来き給けるに内の

御遊よ文人をもとせ給けるをとこに出て積給ける

二條太皇太后宮大貳

出きてや神の文人たちの中ふまらせ斬く折そ慈しさ

康申歌ひ神宗の次よ女房うた合し給ひけるに

禖子内親王家宣旨

折てゝはをしみのき此文人ハ代々に柿をふさの末をとら

同三月給けり年舞院よ御ゝ長官して出く女

房達中につかうまつりきる

京極前関白太政大臣

春はいかにこ移の花を橘花さきれらふ出義をそふら

賀茂臨時祭をよみ侍ける

法性寺入道前摂政太政大臣

いか道ハかけの花ハ春あるを見人の夜よ霰きをとらん

同心を読侍ける　貫之

山高しまてとふわか衣乃ある山もれなくそ我ハ袖にはらふ

道因かすゝめ侍りける広田社歌合社頭雪をよみ侍ける　三条入道左大臣

山路にもすへむ花に降雪ハ分さく桜乃散かとそみる

此時宰相還立乃御神楽をよみ侍ける　参議成實

立かへり雲ゐの月も影そへて庭火のかけも山ゐの袖

神楽をよみ侍りける　大納言通具

そのかみの花まつくいとの霜に月影さゆる袖のけしき出

建保三年百首歌奉りける中に三室山　正三位家隆

神の木にかけし三室の山風まし錦きりの山風とと月もやとる

百首歌読侍けるに　後京極摂政前太政大臣

とくの河八十瀬の波にすれる神楽の心春日みかな

春日山枯みしき道ふ分ていくよしわまねく御代の藤の末迄

建保六年内裏歌合秋哥　僧正行意

春日山尾上にたなひく秋霧は八重雲乃秘ハきこ出

日吉垂跡の心をよみ侍りける

前大僧正慈圓

ちりの浦よるのうみ波立てあさくなりけり我ぞ思ひし
昔日はよきひとの見え先立し山はけふ波あらしふかき
うきよりも来ぬ身なりとも世とともに世の月の影

述懐の心をよみ侍りける中に

わかそのむかしをや袖をぬらしつゝ人をしらぬ涙ぞ
祝部成仲八十路にかゝるまでのなかにも見侍りけり

祝部成仲

かぞふれは八十の年に成よりも老のなみたをかけて

千五百番歌合に　土御門内大臣

八百よろつ神のちかひは世よにいにしへの仏のみなもとゝなる世

祭をよみ侍りける　参議雅経

かけていのるみ神山の麓人しらぬみちに法の道

社頭にまかりける述懐

祝部忠成

霜八こしをとけしとみちらぬ榊葉に年ふりてかはらぬ世の神かき
影しら浪　寂蓮法師

もみち葉のあきに玉垣いくとせ秋の時雨にめくみそめてなれぬ

秋の歌とてよみ侍りける　賀茂重政

神山のふもとの木々も松も茂りつゝ心にかきこそ見えぬ人そなき

述懐歌よみ侍りしに　荒木田延成

八重桜さけるを見ても我年のつもるにつけていかにせん

駿河国に秋夜し侍りけるに富士をみてまかりける

平泰時

ちはやふる神代の月のさえぬれはみたらし河もにこらさりけり

寛喜三年伊勢勅使にてまかり侍るに當日まて雨ふりくらし侍りけるに宣旨うけ給はりてなをよひも月よく清し侍りけれはよみ侍りける

卜部兼直

天津風あめのやへ雲吹はらへやかてさやけき日のひかり見ん

午時より雨も晴侍りけるに

紅葉を読侍りける　法印慶算

里かくる山嵐をきくからに小倉山まてよその紅葉を秋そひとしき

題不知　恵慶法師

霜枯やまのかひらの紅葉をみてこゝにとゝまる秋の宮つこ

能因法師

錦にはたちかさねたる衣きてこそみよましを山かへりこし

新勅撰和歌集巻第十

釋教哥

土佐国室戸といふ所にて　弘法大師

法性の室戸といへと我すめは有為の波風よせぬ日そなき

蓮の露を読侍ける　空也上人

西海の月は草葉におく露をかゝるをりてそ蓮にやとれる

いこまの山のうへにて月を見侍けるに　大僧正行基

法の月久しくもかなと思へともさ夜ふけにけり光かくしつ

題不知　千観法師

法身の月はわか身をてらせとも無明の雲の見せぬなりけり

尼の戒受侍けるに　大僧正観修

結ひおくよ十たひましはれけりつまし八人のさけもあさしと思ふな

大僧正明尊山階寺供養の導師にて草木成仏のよし説侍けるをきゝて朝によみてつかはしける　大僧都源観

草木まて仏の種となりつるはこのことの葉もたのもしきかな

返し　大僧正明尊

法も又仏のうちにこたへける風の吹くもみなりのり哉

錫杖のこゑをよみ侍りける

六の道をはなれて三世の仏はそこの杖よりてこそなれ

法性寺入道前摂政家にて法花経二十八品歌よみ侍りけるに序品

権大納言行成

むかしみしむかしの色にちりかはらぬはけふの法のたよりなりけん

五百弟子品

法性寺入道前摂政太政大臣

きえはてん人ならませは衣手にかけし玉をもしらてやはありし

第八品の心読侍りける同品

少僧都源信

袖のうへにし玉をかけみしとしらすしてはかなくもさすらひにける

観音院にて法対にせさせ給ひける時の心を

冷泉院太皇太后宮

よろつ代の民のうれへをききつくは来てしかるへきこそはなき

無色和言集の般若心経

選子内親王

世の中をいとひはなるゝ法はあまたあれとも心にとゝまりける

普賢十願請仏住世

見し人のかたちを見すてかくれにし世にのみこそはかくれなきて

薬王品盡是女身

春の日のはなをきてかへる人のいかてかまことをもとめける

百首歌中に大悲代受苦の心を　　式子内親王

うつりゆく人の心のうちにのみかはるは身こそ悲しかりけれ

待賢門院中納言人にすゝめて法花経二十八品の歌よませ侍りけるに譬喩品其中衆生悉是吾子の心をよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

ひとり子とおもふに歌はん世の中にいかなる法の心ありける

随喜功徳品

谷川のなかれの末を汲人もきくはいかなる心なりけん

美福門院に極楽六時讃を絵にかゝせられ侍りて書へき歌たてまつりけるに宮殿寳閣をよみ侍る

銀花園をはなしてかなしむ

かぎりなき花の露にむすはれぬるは雲のいろをとめてこそみれ

白銀にてうつしたてまつりける普賢菩薩に

白妙の月の光とみえけるは法をはこひしかたちなりけり

舎利弗悲歎といふ事をよみ侍りけるに　　前大僧正慈円

昔の法は鷲の山に出し日のかくれてのちの光なりけり

月も雲もはるゝ心に晴ぬればかくれぬものを世々の秋の月

金剛界の五部をよみ侍りけるに　　佛家

いはえ上に光をはなちし月とかきりなかれは一きえの光

塵経本の心をよみ侍りける

かねてよりみにはをしてたくなる山のはくらし出ける月をみるかな

家に百首歌よませ侍りける時又智大僧正覚忠

心を　法性寺入道前関白太政大臣

くもりなくみかきはなちし法よりてうつすこゝろの鏡なれ

阿含経　藤原隆信朝臣

ありとやは風まつ雲をはらひてもかへさとしの[illegible]けり白雲

安楽行品　藤原盛方朝臣

山ふかくこもりし人は法の花をやたえぬ[illegible]

法華経提婆品の心を　法印慶忠

法のためみをもをしますつかへし仙人にかへりて道のさかへをそしる

昔我記のたかさて結縁経供養し侍りける所に薬草

喩品をよみ侍りて　権大納言宗家

法の雨に我もやぬれんむつましき[illegible]草葉なりけり小

二十八品の歌よみ侍りけるに寿量品

八条院[illegible]

我をまつ[illegible]しもしぬ[illegible]松は昔の世よ

随縁にて

天津風雲のかよひち吹まかりぬし女のすかたは法の筵に

勧発品受持仏語作礼而去

寂然法師

ありくにし鷲の山をたちそめて法の花を家にかへして

薩埵王子の心をよみ侍りける

殷富門院大輔

身を捨る衣にかける竹の葉のうちよりはなかなしからん

百首歌よみ侍りけるに十界の心を　人界

後京極摂政前太政大臣

暮の世に月日のかくれ行はてゝ見えぬ光をいかにせむ

菩薩

秋の月もちの八月の夜半にこそ雲かくれなく秋そのまさる

十二光仏の心をよみ侍りけるに不断光仏

源季廣

月影は入山の端もさはりなくさえぬ光をみるよしもかな

如来無辺誓願仕の心をよみ侍りける

鑁也法師

数ならぬ身は蓬にとむ月を心にかけよはるゝてもみる

中道釈の心をよみ侍りける

信生法師

なかむれハ心の空に雲消てむなしき程にすめる月影

悲鳴咽喉痛恋不祥といふ心をよみ侍る

寂然法師

立かへり又小萩かはらに鳴鹿ハみかりをゆへに友や恋つ来

自惟孤露此堂と

寂超法師

やここそにしをつむひかさ悲をされく霧の林ハ見えとも恋て

十戒哥よみ侍りけるに不殺生戒

法眼宗円

高ふまハかりにも何を縁子なくかゝるこつ霧むすふ見

不偸盗戒

ちえしたかたかれしかさし此名もたゝし立田の山の紅葉のしら浪

不慳貪戒

毎下にをしまぬ名をも見しほとれぬ手積のはまちもおしむあまたよ

経教如鏡の心をよみ侍

蓮生法師

後の世をてらす鏡の影をみよ見しあたしあれハあかなしの道

十如是乃心をよみ侍りける本末究竟等

寂然法師

もと篠原やなかれの此一筋にすゑも末葉もかゝる白露

法性寺入道前関白舎利講の次に人々に十
如是よませ侍りけるに如是躰の心を

後京極摂政太政大臣

春の霞秋の霧にさきたちて月影のみぞすむも世をてらしける

如是性　　讃岐

すむ人も心ひとつをおなしからに心しつらぬ照るの月

大輔人々に十首歌すゝめて天王寺にまうでて侍
に讀侍ける

殷富門院新中納言

心をそかけて見る人をみるもいとゞしく昔恋しき法の誓

天王寺西門にてよみ侍ける

郁芳門院安藝

さもみし入日をしたふもなかなかにこれそ西の門出なりけれ

光明山とふ寺にこもりて侍りける時物に書付
侍ける

後白河院京極

西の海入日をしたふかけそしく心の月のさやかなるらん

なさけの手にひかれてと申ける人に光明真言を
書て送り侍るとて

高弁上人

かきたえし我法よ光のかゝやかんくらき道にも闇はあらなん

何事かと申けれは人の返事に侍りける

清瀧やせゝの岩波高からは山人もしらし風そ吹ける世

暮乃去れこてならせそいくせんさあけく雑きまてはてれあ 是
住坊の北乃岩よ岩かあり定心石と名付松あり
縄床樹とかゝくちニ枝ふして咄するふたらさを
正月宮の日すらしいさあり涌と座禅ところふ松あ
嵐をはけしく吹て墨染の袖よ霧乃浮つゆて
終宵乃越涙みくく石の上をこそ行とて衣裏明珠
乃喩をおもひ出てよみ侍りける
松の下岩ねの苔に墨染の袖乃あられや
かけしきつむ